２０１４年（平成２６年）１月５日（日）　毎日新聞（遠州）

# 障害者働く機会 増やそう

ひと しずおか

授産施設「掛川工房つつじ」施設長 滝口 裕二さん(49)

「農業（アグリ）セラピーという考えがあります。土と触れ合い植物を育てることで心が癒やされ気持ちが落ち着く。とてもいい経験です」

知的障害者の授産施設「掛川工房つつじ」（掛川市長谷）の施設長を2013年4月から務める。就任後、通所利用者の働き場所として、雑草取りの仕事を引き受けた理由をこう説明した。

掛川市が12年から市民参加で進める「いのちを守る希望の森づくりプロジェクト」。昨年までに市内7カ所（総面積約2万平方㍍）に広葉樹の苗木約6万2000本が植えられた。森林再生と防災林の育成が目的だが、植樹後4～5年間は雑草取りなどの手入れが必要になる。

この事業を主導するNPO法人・時ノ寿の森クラブから、植林場所のひとつである中東遠総合医療センター（同市葛蒲ケ池）の管理を頼まれたのが昨年初夏。2万3000本が植樹された約8000平方㍍の敷地で秋から本格的に作業を始めた。

作業料金は県の最低賃金を基準に支払われる。作業時間は毎回約2時間だ。

地面にしゃがみ込んで雑草を引き抜くのは根気がいるが、「丁寧な仕事は施設利用者に向いています」。約40人の通所者が交代で作業に出るが「また行きたい」と希望する人もいるという。

この授産施設での主な仕事は、祭りで家々の門口などに飾られる軒花作り。周辺の自治会などからの注文は年間20万本を超えるという。だが景気が上向きになってきたとはいえ障害者の就労環境は依然厳しい。「少しでも働く機会を増やしたい」と願う。

同医療センターでの植樹林の手入れは、掛川工房つつじを含む近隣の4施設が共同で請け負っている。「参加者をもっと拡大させたいですね」

掛川市は昨年4月、市自治基本条例を施行して「市民との協働のまちづくり」を推進している。障害者が木を育て森林再生事業に参加すれば「協働の輪」はさらに広がる。

「今は草取りだけですが、やがて種から苗木を育てて販売したい」と夢は膨らむ。【舟津進】

大学卒業後、肢体不自由児の施設「ねむの木学園」に就職。約20年間勤めた後、社会福祉法人・掛川芙蓉会に移った。掛川市在住。妻と1男の3人暮らし。